

害の様相と除草必要期間の実証. 雑草研究. 28
(2): 129-134.

する生態学的研究. 農業研究センター研究報
告. 1: 37-103.

10) 野口勝可(1983) 畑作物と雑草の光競合に関

— たかが雑草・されど雑草 (1. ドクダミ) —

廣 田 伸 七

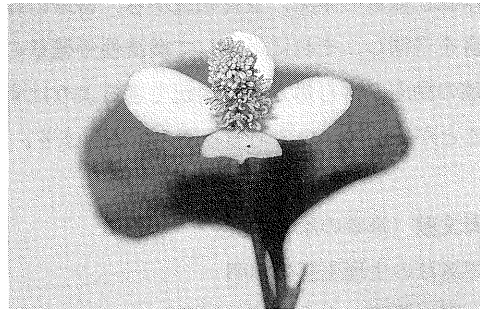
雑草にはたかが雑草と片付けてしまうにはあまりにもかわいそうな草が数多くある。利用の仕方によってはすばらしい効用のあるものもある。ドクダミもそんな草の一つである。

ドクダミ（ドクダミ科）は全国に分布し、最も普通に見られる草である。やや湿り気のある畑や果樹園、溝、水路の縁、住宅地と至るところに生育する。地下には白い地下茎が縦横に走りところどころから芽を出して群生する。この地下茎は切断されても断片から再生するので一度畑に入ると防除が難しくなる。

梅雨の末期頃になると独特の香りを持つドクダミが雨に濡れながら白い花を咲かせる。その純白で清楚な花はかなり目立ちさぞ虫の目を引くと思われるがあまり虫は寄って来ない。ドクダミは花粉がつかなくとも種子ができる単為生殖（雄性とは無関係に子孫を生ずる生殖法、つまり卵細胞が受精なしで発生を始める現象）をするのでその必要がないのである。では何故あんなにも目立つものをつけているのだろうか、不思議である。このドクダミの花、茎先に大きな純白の花弁を十字状につけその上に黄色の雄しべと雌しべを円柱状に多数つけていると普通は誰でもそう理解する。ところが植物学的には全く違うのである。円柱状の黄色のものが花で花弁もがくも無く、雄しべと雌しべだけからなり、黄色のものは葯である。その下の4枚の純白で大きなものは総苞という、葉に近い性質をもつ苞であるというのが植物学的な説明である。しかし、学問は日進月歩。百数十年も白いものは花弁ではなく総苞といわれてきたものが、

遺伝子の研究が進むにつれて、ドクダミの総苞は花弁であるという研究発表もある。さていずれが正しいのか興味がある。

ドクダミは日本薬局方に収録されている薬用植物である。子供の頃化膿性のはれもののができたとき、ドクダミの葉を取ってきて、火に焙りやわらかくしてから患部に張ってもらった記憶が残っている。薬局方によると生の茎葉をすりつぶしこのしぼり汁には抗カビ作用があることからただれ（水虫、しらくも、



▲花

靴ずれ、股ずれなど）にはこれを患部につけると効用がある。また、おできや化膿性のはれもの（腫傷）には生の葉を火で焙ってやわらかくしてから患部に当てて絆創膏などで止めておくと、うみを吸い出してはれがひく効用がある。さらに、6～7月のドクダミの花期に全草を刈り取って日干しにしたものを十葉（じゅうやく）と呼び、これを1日20g煎じてお茶がわりに飲むと、利尿、解毒、身体のむくみや便通をよくし、高血圧や動脈硬化の予防効果がある。なお、乾燥すると生のときの独特の臭いは消える。

こうしたことから、最近の健康食品のブームに乗って、ドクダミを配合した健康茶が売られている。正にされど雑草である。

因みにドクダミには十葉（じゅうやく）の別名があるが、これは「大和本草」に「わが国の馬医これを馬に用いると、十種の葉の効能があるので十葉という」ということからきており、ドクダミは馬の十種の病気を治すということからの名前である。



▲花期